

第三号は第一号と第二号が執筆された明治2年から5年経った明治7年に執筆されている。全部で149首と比較的歌の数が多い号であるが、全体を外観するために先行研究を参照して各首を大まかにグループ分けすると以下ようになる。

- (1) 屋敷の掃除 (1～6)
- (2) 水囊と砂によるろ過の喩え (7～14)
- (3) 人間を創めた話 (15～18)
- (4) 心を澄まして聞く者がいない (19～27)
- (5) この世は神のからだ、人間は貸しもの (28～41)
- (6) 人をたすけたら我が身がたすかる (42～47)
- (7) 内を治める「しんばしら」 (48～58)
- (8) 時節の到来 (59～67)
- (9) この世を創めた神の話を嘘と思うな (68～72)
- (10) 教祖お隠れの予言 (73～76)
- (11) 人間の力と神の力 (77～91)
- (12) 心のほこりについて (92～103)
- (13) 神の不思議 (104～112)
- (14) 人間の浅はかさ (113～119)
- (15) 上に立つ人々の心得違い (120～127)
- (16) 「よふぼく」への試し (128～139)
- (17) 「高山」にも「よふぼく」を (140～149)

各グループに便宜上タイトルをつけてみたが、第三号(あるいは「おふでさき」全体)を通して一貫して流れているテーマの一つは人々の心にある「ほこり」の掃除を親神が急くほど望んでいることである。そのような「胸の掃除」は天理教の信仰者にとっては実践項目の第一番目に挙げてもいいほどに自明な事柄であるが、その自明性ゆえに「おふでさき」を読む上で留意すべきことは「おふでさき」から「胸の掃除をしなければならぬ」という当為(〇〇すべき)の結論を得るだけで、親神が人々の胸の掃除というものをどのように捉え、具体的に人々にどのように促しているのかという点を見逃してしまうことと言える。通底しているテーマはシンプルでも、それを実現する我々の現実はそのほどイージー(容易)ではない。「胸の掃除」がいかに達成困難であることは誰しも実感するところであろう。したがって、「おふでさき」から性急に当為の結論を引き出そうとせず、その内容を詳しくみることで「胸の掃除」の内幕と方法を学ぶことが重要である。

それでは最初から順に読んでいきたい。第三号は、「門の内にある建物ははやく取り払って」(三号1)「速やかに掃除をしたならば新しい建築を始めよ」(三号2)と述べ、当時中山家(「屋敷」)にあった古い建物の撤去と新しい建物の建築という具体的な話題から始まる。第三首で「真実に掃除がきれいに来たならば、あとは神の方へと心一筋になって、心が自然と勇んでくる」と述べられていることを考慮すると、ここでいう「掃除」とは「建物の取り払い」という意味と「心の掃除」という二つの意味があると言える(「屋敷の掃除」)。こうして新しく建てられた建物は「中南の門屋」と呼ばれ、翌年の明治8年に竣工し、中山みきは同年から16年までそこで教えを説かれていた。そして、その結果「だんだんと世界の心が勇んでくると、人間を創めたところ(にほん)が治まってくる」(三号4)と述べ

られている。

さて、この第四首を深読みすると、作用主体としての「せかい」と「にほん」とそれらの作用である「勇む」と「治まる」が対比的に置かれている。つまり、「せかい」が「勇む」と、「にほん」が「治まる」という図式となっている。そして、続く第五首では、「今までは人間は何彼につけて分からなかった、これから見えてくる不思議な合図が」と述べ、親神の意図するところを理解できない人間の浅はかさを指摘している。

興味深いことに、この第四首と第五首のような論し方は第三号の中に再び登場する。「これからは世界の心を勇めかけて、にほんを治める準備をする」(三号114)、「にんげんの心というのは浅はかであるから、見えている事ばかり言う」(三号115)。そして、これらの歌を最初に読んだのがみきの周囲の人々(つまり「にほん」の人々)であったことを加味すると、これら一連の歌の背景には「にほん」がまだ治まっておらず、それは「にほん」の人々が「せかい」を勇ませていないことに起因し、そして、その理由は彼らが「見えている事」に囚われていたからであると解することができる。

ところで親神はそのような人間の浅はかさを残念に思う一方で、実は「目に見えている事柄」にも配慮していることが窺われる。というのも、「目に見えている事柄」の一つの例として第三号の冒頭の建物の新築が挙げられるからだ。つまり、親神は「目に見えている事柄」に囚われがちな人間の心を考慮して、「目に見えている事柄」にも具体的な変化を加えたり新たな解釈を与えたりして人々の心の掃除を促されているといえる。そして、続く第六首で「来ない者に無理に来いとは言わないが、ついて来るならいつまでも安心の道が得られる」と詠んで、建物だけではなくその建物に出入りする人々についても論している。

次に、このような冒頭の建築をめぐる展開に続いて第七首から十四首までを一つのかたまりとして、当時使用していた泥水をろ過するための砂や水囊を喩えにして人々の心の掃除に関する方法を提示されている。つまり、「この水をはやく澄ます準備を急ぐので、水囊と砂にかけて澄ませよ」(三号10)、「この水囊がどこにあるか」といって、人間の胸と口とが砂と水囊である(三号11)と述べ、人間の濁った心をろ過する水こしは何かといえば、親神の教えを口で論し、それを胸で悟ることであると説いている。したがって、この喩えから分かることは信仰者がその心を掃除する一つの手がかりは親神の教え・論しを本心から聞くことであると言える。

付け加えて言えば、このような教えの論し・悟りと心のあり様について、みきは実生活のなかで様々な喩えを用いて説いている。例えば、一枚の紙を丁寧に伸ばしながら「人のたすけもこの理やで。心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで。心も、皺だらけになったら、落とし紙のようなものやろ。そこを、落とさずに救けるが、この道の理やで」(『逸話篇』45)と説き、あるいは、人の心を栗に喩えて「栗はイガの剛いものである。そのイガをとれば、中に皮があり、又、渋がある。その皮なり渋をとれば、まことに味のよい実が出て来るで。人間も、理を聞いて、イガや渋をとったら、心にうまい味わいを持つようになるのやで」(『逸話篇』77)と論されている。